

母なる子

——フラナリー・オコナー「森の景色」における親子関係の攪乱——

大久保 良 子

序

アメリカ南部のカトリック作家、フラナリー・オコナー（Flannery O'Connor）研究では、作家本人が言明するキリスト教的観点からのアプローチが長らく最重要視され、その他の観点からの研究は周縁におかれがちであった。殊に、70年代から80年代にかけてのフェミニズム批評の流行にもかかわらず、オコナー研究におけるフェミニズム批評が今世紀に入るまで立ち遅れていたのは、伝統的なジェンダー規範におさまらない女性たちが罰せられ、男性的権力に屈する形式の物語を少なからず描くオコナーが、当初、「南部父権社会」、「父権的宗教」双方を称揚すると目され、フェミニストたちにあまり積極的には受け入れられなかったことにも起因する¹。フレッド・ホブソン（Fred Hobson）は、「南部父権システムに本当の意味で挑まなかったこと——あるいはそのように当時みなされていたこと——」が、当時男性が主流の南部文学の文壇にも迎え入れられた理由だと指摘しているが（74）、なかでも、伝統的なジェンダー規範を逸脱した少女が、父権的権力に抗いながらも結局はその犠牲となるプロットを持つ短編、「森の景色」（“A View of the Woods”）は、それを裏書するテキストの一つであったろう。

型どおりの父権的宗教観で女性が男性的権力に屈服するプロットにも説明を施そうとする宗教的解釈への抵抗の一つとして、フェミニズムの観点からの読み直しが盛んになされるようになった今日、「森の景色」は再評価の対象として議論の俎上にのせられることとなった。南部の急速な産業化への批判やオコナーの農本主義的態度を読み取る試みが時になされるものの、母子関係のテキストが中心となるオコナー作品では比較的マイナーな扱いとなっていた本作品を、フェミニズム的テキストとして捉えなおそうというのである²。父権的権力に反発する娘の物語、女性が性的脅威に晒され、犠牲となる父権社会を告発する物語といった、オコナーのもつ、フェミニズム的要素が読み解かれるようになるにつれ、「父権社会に本当の意味で挑まない」とされてきたこれまでの解釈が大きく変化しはじめている点で、フェミニズム批評は刮目すべき成果をあげている³。

オコナー研究におけるフェミニズム批評では、オコナーが多く描いた母子関係に着目した研究が主になされ、父子関係のテキストは、父権的権力構造の問題を指摘できる場合を除いては、二次的な扱いとなりがちである。なるほどオコナーの眼差しが映し出した男たちは、ジョセフィン・ヘンディン (Josephine Hendin) 曰く、「男は年を取っているか、眠っているか、死んでいるか、病気か、不具か、殺人者か」(68) で、クレア・カハネ (Claire Kahane) 曰く、父は不在か、描かれたとしても多くの場合サディスティックで、その攻撃性が性役割と結びついており (“Flannery O’Connor’s Rage of Vision” 126)、さらに、自伝的に描かれる母子関係に対し、父子関係は決して自伝的には描かれることはなく、祖父と孫、叔父と甥といった変奏を取る場合がほとんどとなっているという、一種の抑圧を見せるという点で、特徴的ではある。しかしながら、ジェンダーの観点からオコナー作品を捉えなおそうとすると、父子関係を扱ったテキストにも、母子関係のテキストで多用される「鏡」のモチーフが散りばめられている点は注目に値するだろう。

オコナー作品における「ダブル」の表象にいち早く着目したフレデリック・アサルス (Frederic Asals) は、「鏡」のモチーフを「ドッペルゲンガーのモチーフ」(97) の一つとして捉えているが、対象関係論的知見から女性ゴシック小説を分析するカハネは、母子関係特有の心理状態に一步踏み込んだ、興味深い指摘を行っている。すなわち、幼児の内的世界において、幼児と未分化である母親が、子供にとって原初の鏡としての役割を果たしており、そのような母に対する恐怖に、目に見える形を与えたものが、「ゴシック的グ

ロテスク」に彩られるオコナー文学である。そしてそこには、自己と他者の境を攪乱する鏡のイメージ、「死んでいながら死んでいない、幽霊のような母の存在」、女の肉体への恐怖といった「女性ゴシック」的要素が横溢しているとの指摘である（“The Gothic Mirror” 343-347）。分析作品として扱っている、母子関係を機軸とした『賢い血』（*Wise Blood*）や「不意打ちの幸運」（“A Stroke of Good Fortune”）においては、カハネの説明はある程度の説得力をもつのだが、鏡のイメージを見てみれば、変奏を含めた多くの父子関係のテキスト群、たとえば長編小説『激しく攻むる者はこれを奪う』（*The Violent Bear It Away*）や短編、「森の景色」、「黒んばの人形」（“The Artificial Nigger”）など、父親的人物がほぼ独占的に子育てを行うテキストにおいても例外ではない。特に「森の景色」では、祖父と孫娘というジェンダーの違いがあるにもかかわらず、鏡のモチーフが使われ、自己と他者とが乱反射する、興味深いテキストの一つなのだが、リチャード・ジャンノーネ（Richard Giannone）も指摘するように、母子関係のテキストを中心に取り組む多くのフェミニスト的観点からの論考では、本作品におけるジェンダー表象は看過されがちであった（95）。

このような状況の原因の一つとしては、オコナー研究におけるフェミニズム批評が往々にして男性対女性という二項対立を前提とした上で、父権の権力構造に抑圧される女性を読み取ろうとしていることがあげられよう。だが、鏡のイメージが横溢するオコナー最後の長編、『激しく攻むる者はこれを奪う』では、父代わりの人物が、洗礼によって子供に新たな生命を授け、養い、育てるという、母子関係の変奏形ともいえる関係がテキストに溶け込んでいるように、看過されがちな父子関係のテキストもまた、オコナーのジェンダー・アイデンティティや、一筋縄ではいかない親子関係の葛藤を読み取りうる可能性を秘めたテキストとして、慎重に検討されるべき重要性をもつのではないだろうか。

加えて、オコナーの場合、女兒にとって特に強いアイデンティティの対象となる同性の母親だけでなく、書きたいという願望が叶わないまま、15歳の時にオコナーと同じ病で亡くなった父親との関係も、そのジェンダー・アイデンティティに大きな影響を与えていた伝記的事実は重い。オコナーは書簡の中で以下のような独特のジェンダー観、宗教観を打ち明けている。

What you say about there being two [sexes] now brings it home to me. I've always

believed there were two but generally acted as if there were only one. I guess meditation and contemplation and all the ways of prayer boil down to keeping it firmly in sight that there are two. I've never spent much time over the bridegroom analogy. For me, perhaps because it began for me in the beginning, it's been more father and child. (*The Habit of Being* 136-37)

父と子の関係に親しみ、性の区別も一つしかないようにふるまってきたというオコナーのジェンダー観は、伝統的キリスト教のいわゆる“bridegroom analogy”、すなわち、神を愛し慕うキリストと同じく、信徒もまたキリストや教会に妻のように従うべきとする、男女2つの性の違いを指定する伝統的キリスト教のジェンダー観とは乖離するものである。性の違いを見つめる眼差しを獲得するのに「祈り」を必要とした、オコナーの文学を考察するにあたり、ジェンダーや親子の分類をいったん解き、オコナーの父子関係のテキストにおいていかに母子関係が変奏的に描かれるか、「森の景色」を例に見ていきたい。

1. 「森の景色」における母なる子

79歳のマーク・フォーチュン (Mark Fortune) は、嫌悪の対象である娘婿のピッツ (Pitts) と娘との間に生まれてくる子供に、自分の名前の一部を取り名づけることを断固拒否したものの、鏡に映したように自分そっくりな容姿をした末の孫娘を見て後悔し、自分をこの世に生み出して亡くなった母親の名を取り、メアリー・フォーチュン (Mary Fortune) と名づける。以来、常に孫娘の側にいて行動を共にし、実の両親の存在にもかかわらずほぼ独占的に孫娘の養育に情熱を注いでいる。

この物語の興味深い点は、祖父と孫娘という、ジェンダーも年も違う2人が、外見、内面共に瓜二つであり、孫娘だけではなく、祖父もまた、アイデンティティの混乱をきたす点にある。

When the baby came, a girl, and he had seen that even at the age of one day she bore his unmistakable likeness, he had relented and suggested himself that they name her Mary Fortune, after his beloved mother, who had died seventy years ago, bringing him into the world. (*The Complete Stories* 337)

まず注目すべきは、フォーチュン老人の「愛する母親」(CS 337)が、彼を産み落とすと同時に——つまり、これまで一体だった母と子供が分離したその時に——命を落としている点だろう。生まれたその時から母親と強制的に分離させられ、これまで母親なるものを直接的に経験しえなかったフォーチュン老人が、亡き母の名前を、自分そっくりな存在に与え、自分のものとして所有しようとしていることは示唆的である。たとえば、メアリー・フォーチュンが自分と似た性格を示し、行動するさまを誇らしく思う一方、孫娘がピッツ家に特徴的な態度を示せば、「自分がその表情を浮かべでもしたかのよう」に、汚染された」(CS 351) 思いがして、とたんに不機嫌になる。二人の間に距離ができれば、一体であった母親が自分の元から離れるのを阻止しようと試みる幼児のように、あらゆる甘言を使って、メアリー・フォーチュンを自らのそばにとどめようと試みる。さらに後に検討するように、孫娘のうちに、自分としては認め難いもの——すなわち、メアリー・フォーチュンの、実父ピッツへの思慕や同一視——を発見したときには、その認め難い部分を破壊しようと、自己の鏡のような存在を攻撃する。70歳の年の差にもかかわらず、「精神的距離はほとんどない」(CS 336)と見做されているメアリー・フォーチュンは、老人にとっては、70年ぶりに得た母のように自分と一体といえる唯一の存在なのである。あくまで現実には祖父と孫娘の関係なのだが、ここにみられるのは母子関係の変奏形、つまり象徴的な意味においてメアリー・フォーチュンはフォーチュン老人にとっての「母」であるといえるのではないだろうか。

このように仮定し再びテキストを見直してみれば、フォーチュン老人と孫娘には、母子関係が示す特徴がさらに発見されるだろう。たとえば、早期の母子関係が保証するとする、無限のナルシズムは、老人の自己愛や孫娘への偏愛に見られるし、自らの所有する土地の将来に向けた開発への欲望は、常にそばにいて共に見守るメアリー・フォーチュンによって支えられる。自らの財産である土地をメアリー・フォーチュンに渡すつもりでいる老人の目的は、「われわれ」の土地を他人に売り、開発することで、老人から借用する土地を自分のものとして所有したがつて困らせるピッツを困らせ、自らの権力を家庭内に誇示することにある。老人は自らの欲望を「われわれ」、つまりメアリー・フォーチュンと自分自身の欲望であると信じて疑わない。老人が、土地を持たないピッツに対し権力を誇示することが、ピッツを苛立たせ、老人への腹いせとしてメアリー・フォーチュン虐待を生んでいるのだが、それ

がいかにも、メアリー・フォーチュンから父の愛情を奪い、少女を家庭内で孤立させ、精神的に苦しめているか、思いを馳せることはないのである。さらに、末娘のメアリー・フォーチュンが老人の財産や土地を譲り受け、父権的家庭内のヒエラルキーを転覆させることになれば、少女はどのような苦境に立たされることになるか、老人は想像すらしない。

一方、メアリー・フォーチュンは、祖父に対して、反抗を表にあらわすことを躊躇しない。祖父に対する孫娘の反抗的態度は、単に祖父譲りの気骨を示すだけではなく。9年間にわたる日常の育児で築かれた、祖父と孫娘の間の親密さと信頼が前提となってけんかも可能になるのであり、二人の言い争いは絆の強さの証左でもあるからである。メアリー・フォーチュンは自分で階段を上がれるようになった頃から、毎朝、2階で眠る祖父の元へ行き、起こすため、老人が一日の初めにまず目にするのは、ずっと孫娘の顔であったし (CS 349)、たびたびある口げんかも、「闘鶏の目の前に鏡をたててその影と闘わせる遊びに似て」(CS 341) 長引くことはなく、翌朝には、孫娘はベッドで眠る祖父の胸に馬乗りになり、開発工事の光景を早く見に行こうと誘い出すのである。

She reached the car and climbed back onto the hood without a word and put her feet back on his shoulders where she had had them before, as if he were no more than a part of the automobile. (CS 339)

孫娘は、祖父が車の一部であるようにその肩に片足をかけ、将来自分のものとなる土地の開拓を、祖父と共に興味深く見守る。また、父に鞭打たれたことを問い詰められた際、祖父に歯向かうメアリー・フォーチュンは、祖父の車に乗ることを拒むが、その場面では、“I refuse to ride a Jezebel!”という祖父に対し、“I refuse to ride with the Whore of Babylon” (CS 343) と返し、男性である祖父に対して 淫婦 (“Whore”) という、女性に対するのしり言葉を発している。むろん、テキスト中でフォーチュン老人自身も「淫婦ってのは女だ!」「そんなことも知らないくせに」(CS 343) というように、この場面は少女の無知を表す場面とはなっているのだが、これまで見てきたような母子関係の変奏を鑑みた際、ここで描かれる言葉の誤用は示唆的といえるだろう。あわせて、反抗はおろか、会話もろくにできない、実父ビッツとの関係に象徴されるような父権的親子関係とは一線を画す親子関係が築かれていること

が確認できる。

2. 父権的家庭内での父、母、娘のありよう

メアリー・フォーチュンの実の父母との関係はどのようなものだろうか。母は、一方では娘を正当な理由なく鞭打つ暴力的な夫、ピッツから娘を守ることをせず、むしろ、鞭打たれるのはメアリー・フォーチュンの言動のせいだと夫に同調して娘を責め、育ての親ともいうべきフォーチュン老人からは、“You’re no kind of a mother. You’re a disgrace!” (CS 344) と母親失格の烙印をおされている。また一方では父、フォーチュン老人に娘として義務的に従って身の回りの世話をする、2人の男に従うドメスティックな女となっている。

It’s my duty to stay here and take care of Papa. Who would do it if I didn’t? I do it knowing full well I’ll get no reward for it. I do it because it’s my duty. (CS 337)

母は、父に尽くすことを娘である自らに課せられた義務とし、そして明らかに不満をもちながらも、それを押し殺し、何の見返りも求めない義務として自らを納得させる。「義務」として表向きは抑圧せねばならない父への不満が、夫による娘虐待の容認へと繋がっているとも推察されるだろう。すなわち、夫と娘を用いることで、父に対する復讐を間接的に遂げていると考えられるのである。

「(メアリー・フォーチュンは) 鞭打つことのできる俺のもの」(CS 341)と申明するピッツもまた、娘を所有物として捉える父親となっている。ズボンのベルトをはずし、脚を鞭うつことで、9歳の少女の肉体に、自らの父権的権力を刻み込むこのサディスティックな行為は、キャサリン・ブラウン (Katherine Brown) やマーシャル・ジェントリー (Marshall Gentry) も指摘するように、少なからず性的な色合いを帯びる行為であるといえる (Brown 52-53, Gentry 64-73)。ピッツは、親としての権力だけでなく、性的な力を持った男としての権力を、娘に刻み込む父なのである。

祖父との会話場面や行動場面が、口論も含め、頻繁に登場するのに対し、実の母や、暴力的な父、あるいは兄弟たちとメアリー・フォーチュンが仲むつまじく会話をかわす場面は一切出てこず、こうした場面の圧倒的な不足が、メアリー・フォーチュンの家庭内での孤立ぶりを窺わせる。かわりに、少女

は一人、父に鞭打たれた脚に向かって会話する。

The old man had often sneaked up on her and found her alone in her conversation with her feet and he thought she was speaking with them silently now. (CS 350)

むつまじいつなかりを両親、特に父と得られず、直接に愛情を注ぐことも注がれることもかなわず孤立するメアリー・フォーチュンは、それゆえにいつそう、父や家族との絆を憧憬するのだろうか。しばしば正当な理由もなく鞭をふるう父親であっても、少女は父に声をかけられれば老人を置いていつも一人「パパ」についてゆき、「恐怖が一部、尊敬が一部、そしてなにか別のもの、協力的に似たようなもの」(CS 340)が入り混じった眼差しで見つめ、父に鞭打たれるままとなる。そしてそのことを祖父に問い詰められても、「誰もわたしをたたいてなんかいない」(CS 340)と断固否定する。「協力」、「尊敬」とは、おそらくは、自分が祖父の代理として父に鞭打たれることによって、父は直接むけられない祖父に対する恨みを晴らすことができ、また、土地を所有しない父は、暴力によって娘の所有を示すことによってのみ、祖父にも勝る権力を家庭内で顕示できるからだろう。父に疎まれる娘は、鞭打つ父に対する怒りをいったん抑圧させ、暴力と黙従によってしか結ばれない絆であっても、それを父との絆としてとどめようとする。父の印が刻み込まれた脚に向かってひそかに会話することは、自らを慰め、父に対する気持ちを整理する行為なのである。

このような父であるにもかかわらず、祖父がある牧草地を売り払い、ガソリンスタンドを建てる計画を祖父が立てたその時から、少女が、これまで仲のよかった祖父と距離を取り、祖父とは異なるピッツ家の人間としての自己を主張し始めるのはなぜなのだろうか。

まず、父が仔牛を放牧させるその牧草地を「芝生」と呼んで、芝生とその背後にある森とをポーチからじっと眺めることから、少女の、父への隠れた思慕が窺えるだろう。その牧草地の開発を祖父が提案したときには、他の土地の場合と打って変わって、「パパが仔牛に草を食ませる芝生なのに」「森が見られなくなる」(CS 347)と祖父に抗い、「祖父よりも好きな、誰か」(CS 347)をじっと見つめるように、ポーチから芝生と森とを眺めるのだ。メアリー・フォーチュンにとって、その光景を目に入れることは、特別な意味があったはずである。セルジュ・ティスロンは、肌と肌が触れ合う当初の母子

関係から「乳離れ」させられた際、当初肌と肌の接触に割り当てられていた官能性の一部が、新たに発達してくる眼差しによって埋め合わされ、手で触れられない対象を「眼差しによって愛撫する」(147)ことが可能になると指摘するばかりでなく、何らかの対象に向けられる眼差しはすべて、その眼差しを向けている人間にとっては、そこに投影する心的映像と感情的状態を再び自分のものとして所有しなおすことであると指摘する(93)。ポーチから少女が眺める光景は、父が仔牛を放牧し、草を食ませる芝生——やさしく平和で、幾分母性的な父のイメージが喚起される場と、鞭打ちが行われる森——恐ろしいながらも父との緊密な絆が体に刻み込まれる場となっている。芝生と森とを同時に眼差しに入れることによって、ようやく少女は、恐ろしい父のイメージを幾分か和らげ、心に所有しなおすことができたろう。しかしもし祖父がその芝生を売り払い、ガソリンスタンドを立ててしまえば、父の芝生は失われ、森もまた、眺めることができなくなる。そうすれば、眺めることによってせめて心に所有していた父のイメージを、祖父に奪われ、眼差しによってさえ父を所有できなくなるのだ。メアリー・フォーチュンが芝生と森に投影する、父との精神世界を、祖父が他人に売り渡し、ブルドーザーで切り崩し、メアリー・フォーチュンと祖父の世界として永久に覆いつくして、父との和解を阻もうとするのである。

老人によって今大切な土地を奪われようとしている父もまた、現在のメアリー・フォーチュンのように、祖父に所有を阻まれた人物といえる。だが祖父がピッツに対してそのような仕打ちを行うのは、他ならぬメアリー・フォーチュンのためでもある。この知覚が、少女が父や祖父、そして自分自身を見る眼差しに変化を与えたのではなかろうか。祖父一人が考え出した計画であるとはいえ、メアリー・フォーチュンは、「お前がやったのだろう」と父に問われれば、弱々しい、「確信のこもらぬ」(344)震え声でしか否定できない。罰として父の鞭打ちを受ける少女は、これまでよりも激しく祖父に抗うことで、祖父とは意思の異なる違う人間としての自己を主張しはじめるのである。

3. 攻撃、死、そして「母」の発見へ

親に精神的・肉体的に虐待された子供が感じるという、親への「殺人的な怒り」は、それを出しては親を殺してしまうかもしれないといったん抑圧され、それはやがて自分自身へと向けられるようになるとレオナルド・シェンゴールド (Leonard Shengold) は指摘する (147-72)。メアリー・フォーチュンの場合、いったん抑圧された、父権的な父による鞭打ちへの怒りや、父との精神世界を奪おうとする祖父への怒りは、これまでの関係から一変してピッツのように森で鞭打とうとする祖父の行為によって堰を切られ、自分自身とそっくりな存在へと一気に向けられることになる。メアリー・フォーチュンは、まるで悪魔のような力で老人を押し倒し、殴りかかる。

The old man looked up into his own image. It was triumphant and hostile. "You been whipped," it said, "by me," and then it added, bearing down on each word, "and I'm PURE Pitts."

[. . .]With a sudden surge of strength, he managed to roll over and reverse their positions so that he was looking down into the face that was his own but had dared to call itself Pitts. With his hands still tight around her neck, he lifted her head and brought it down once hard against the rock that happened to be under it. Then he brought it down twice more. [. . .]"There's not an ounce of Pitts in me." (CS 355)

この場面は、以前、「お前はフォーチュンなのか、ピッツなのか」と祖父に自分のアイデンティティを問い質され、「私はメアリー…フォーチュン…ピッツ」と答えた際に、祖父に「俺はまじりっけなしのフォーチュンだ」("Well I am PURE Fortune!") (CS 351) と言い返されていた場面や、父に鞭打たれた場面を反転している。メアリー・フォーチュンは父ピッツのアイデンティティを祖父に対して主張しているが、「まじりっけなし」というメアリー・フォーチュンの宣言にもかかわらず、その自己は父と祖父とが入り混じったものとなっている。というのも、少女は、父のように自分を鞭打とうとする祖父に対して、自らもまた父や祖父と同じ行為を反復し、攻撃することで、自分自身を証立ようとしているからだ。一方、老人が格闘する対象は "it" となってジェンダーがなくなり、自己と他者の境界線が曖昧になってい

る。フォーチュン老人、メアリー・フォーチュン、ピッツが乱反射する鏡のように入り混じる孫娘から、受け入れ難いピッツの姿を打ち砕こうと、老人は孫娘の頭を石に打ち据えるのである。

自分とは異なった意思をもつ存在が、自分から離れていこうとするとき、ちょうど愛する母、「メアリー・フォーチュン」が自分を母胎から切り離すと同時に死んでいった過去が反復されるように、自らを祖父とは異なる存在であることを宣言したメアリー・フォーチュンもまた、自分の元から永遠に去ってしまう。その直後、鏡的存在への攻撃の末に心臓発作をおこした老人は孫娘の側に横たわり、あたりを見渡す。

He perceived that there would be a little opening there, a little place where he could escape and leave the woods behind him. He could see it in the distance already, a little opening where the white sky was reflected in the water. It grew as he ran toward it until suddenly the whole lake opened up before him, riding majestically in little corrugated folds toward his feet. He realized suddenly he could not swim and that he had not bought the boat.

[. . .]He looked around desperately for someone to help him but the place was deserted except for one huge yellow monster which sat on the side, as stationary as he was, gorging itself on clay. (CS 356)

最期に老人は、森からの逃げ場となるべき地として、湖のイメージを見、逆に水に呑み込まれるような感覚に襲われている。横たわる老人が、安全を与えてくれる地として見るイメージが水であることは、母親の子宮への回帰願望と見ることも可能だろう。しかしながらその子宮のような場所は、自らを飲み込み、おぼれさせるような恐ろしい場所でもあるのだ。助けを求めてさらにあたりを見回すと、老人は、黄色い怪物、つまりブルドーザーのみが、隣で土を貪り食っている姿を認める。テキスト中、何度か言及されるメアリー・フォーチュンのワンピースの色が黄色であることや、少女が怪物的な力で、父権的な父になろうとする祖父を攻撃したことを鑑みれば、黄色いブルドーザーと、黄色いワンピースのメアリー・フォーチュンとが、老人の目には重ねあわされて知覚されているといえよう。安全を保証する逃げ場のようでありながら、自らを飲み込み、溺れさせるようでもある子宮的空間、土地開発という老人の意思を着々と実行するように土地を貪りながら、死に行く

老人さえ一顧だにせず、圧倒的な存在感をもってそれ自体存在する怪物のようなブルドーザー、そして、自分自身のようにでありながら、別の意思をもつ存在であった、母なる孫娘メアリー・フォーチュンとが、ようやく、死にゆく老人の目に結び合わされ、知覚されたのである。

結び

父子関係を機軸としたテキストの一つである、「森の景色」にあらわれる、鏡のモチーフや母のイメージに着目し、テキストを読み直したとき、従来指摘されてきた父権的権力構造だけでなく、祖父と孫娘という変奏的父子関係に、父権的家庭内のヒエラルキーを攪乱しうる母子関係の変奏や、母子関係にも強力に絡み合った、所有をめぐる葛藤の劇が隠されていることが読み取れる。しかしながら、直接得られない愛情への渴望とアイデンティティの混乱が複雑に絡み合った本作品では、死のみが——つまり、メアリー・フォーチュンの場合には、その瞬間のみ、願望が叶えられて、羨望した父の森に包まれて眠るようなその死に方が、そして老人の場合には、自己の延長のような存在を、自分とは異なる別個の存在として認識するに至る死の直前の瞬間が——、読者にある種のカタルシスを与える。娘が父権的権力構造の犠牲となる物語として、あるいは死によって購いに導かれる物語として、あるいは南部の土地開発に批判的な物語として読むには、あまりにも苦しいアイデンティティの葛藤と愛情への切ない渴望が、鏡のモチーフと共にオコナーが描く、父のテキストには映し出されているように思えるのだ。

Notes

¹ 1985年、ウェルティ、マッカラーズといった南部女性作家のうちの一人としてオコナーを取り上げたルイズ・ウェスリング (Louise Westling) や、同じく1985年、女性ゴシック作家の一人としてオコナーを取り上げたクレア・カハネ (Claire Kahane) が、オコナー研究におけるフェミニズム批評の嚆矢であるが、オコナー研究プロパーとしてのフェミニズム、ジェンダー批評は、2000年のサラ・ゴードン (Sarah Gordon)、2001年のキャサリン・ブラウン (Katherine Prown) が主なところであり、フェミニズム論集が出たのも、2004年、テレサ・カルーソ (Teresa Caruso) 編纂によるものが初めてである。

² フェミニスト的研究からは、娘が父権的権力構造の犠牲になる物語が主に読み解かれ、ジェントリーやプラウンのように、鞭打ちの行為に性的虐待のイメージを読み込むことも少なくない (Gentry64-73、Prown52-53)。一方、キリスト教的観点からオコナーのジェンダー観に注目して「森の景色」を読み直すジャンノーネは、家庭内の力関係やジェンダー構造を解き明かし、父権的権力に犠牲となる娘の姿を読み取りつつも、祖父に抗い死を向かえる少女を“triumphantly victimized” (92) と評し、両者に等しく死がもたらされる結末を、生物学上の男女の差異を超えて天啓に導かれる物語と捉える。このようなオコナーのジェンダー観を、“baptismal equality” (75) によって「もはや男も女もない」(ガラテヤ3:27) 状態へと導かれるとする、聖パウロ的なものであると指摘している (Giannone73-95)。

³ たとえばロバート・ドナホー (Robert Donahoo) はオコナーと同時代のフェミニスト、ベティ・フリーダン (Betty Friedan) とオコナーを比較し、1950年代の女の現実を明らかにするテクストを描いたという点で、フリーダンとの共通点を見出す (9-28)。プラウンは男性が主流であった当時の南部の文壇状況、特にアグレリアンとの関連から、オコナーの、女性的作風から男性的作風への変化を説明している (5-6)。フェミニズム的研究が盛んになることにより、従来の研究では、“Social Misfit” であるゆえに処罰の対象となるとされた女性たち、たとえば「善良な田舎者」 (“Good Country People”) のハルガ (Hulga) や、母になりたくない 「不意打ちの幸運」 (“A Stroke of Good Fortune”) のルーディ (Rudy) などが、フェミニストたちによって「同情を注ぐべき対象」となり、救い出されるようになった。

Works Cited

- Asals, Frederick. *Flannery O'Connor: the Imagination of Extremity*. Athens: U of Georgia P, 1982.
- Caruso, Teresa ed. “On the Subject of the Feminist Business”: *Re-reading Flannery O'Connor*. New York: Peter Lang, 2004.
- Donahoo, Robert. “O'Connor and *The Feminine Mystique*: “The Limitations That Reality Imposed.”” “On the Subject of the Feminist Business”: *Re-reading Flannery O'Connor*. Ed. Teresa Caruso. New York: Peter Lang, 2004. 9-28.
- Gentry, Marshall Bruce. “How Sacred Is the Violence in “A View From the

- Woods“?” “*On the Subject of the Feminist Business*”:Re-reading Flannery O'Connor. Ed. Teresa Caruso. New York: Peter Lang, 2004. 64-73.
- Giannone, Richard. “Displacing Gender: Flannery O'Connor's View from the Woods.” *Flannery O'Connor New Perspectives*. Eds. Sura P. Rath and Mary Neff Shaw. Athens: U of Georgia P, 1996.
- Gordon, Sarah. *Flannery O'Connor: the Obedient Imagination*. Athens: U of Georgia P, 2000.
- Hendin, Josephine. *The World of Flannery O'Connor*. Bloomington: Indiana UP, 1970.
- Hobson, Fred. “Of Canons and Cultural Wars: Southern Literature and Literary Scholarship after Midcentury.” *The Future of Southern Letters*. Ed. Jefferson Humphries and John Lowe. New York: Oxford UP, 1996. 72-86.
- Kahane, Claire. “Gothic Mirror.” *The (M)other Tongue: Essays in Feminist Psychoanalytic Interpretation*. Eds. Shirley Nelson Garner, Claire Kahane, and Madelon Sprengnether. Ithaca: Cornell UP, 1985. 334-51.
- - -. “Flannery O'Connor's Rage of Vision.” *Critical Essays on Flannery O'Connor*. Eds. Melvin J. Friedman and Beverly Lyon Clark. Boston: G.K.Hall, 1985. 119-30.
- O'Connor, Flannery. *The Complete Stories*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971.
- - -. *The Habit of Being*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979.
- Prown, Katherine Hemple. *Revisiting Flannery O'Connor: Southern Literary Culture and the Problem of Female Authorship*. Charlottesville: UP of Virginia, 2001.
- Shengold, Leonard. *The Soul Murder Revisited*. New Haven: Yale UP, 1999.
- Westling, Louise. *Sacred Groves and Ravaged Gardens: the Fiction of Eudora Welty, Carson McCullers, and Flannery O'Connor*. Athens: U of Georgia P, 1985.
- ティスロン, セルジュ 『明るい部屋の謎 写真と無意識』 青山勝訳, 人文書院, 2001年.

Child as Mother:
Disturbances of Parent-Child Relationships
in Flannery O'Connor's "A View of the Woods"

Ryoko Okubo

Synopsis

A Catholic writer in the patriarchal South, Flannery O'Connor wrote many stories in which rebellious female characters are subjugated to male powers. Because of the writer's emphasis on spiritual nature of her work, critics have subjugated feminism to theology. Feminists, too, has long been regarded O'Connor as an anti-feminist, who did not truly challenge the patriarchal Southern society or the patriarchal religion.

These days, feminists re-examine O'Connor's texts to find "women's issues" such as problematic mother-child relationships and accusations against the patriarchal society that victimizes rebellious daughters. However, it is necessary to put more focus on father-child texts, in which she deals with mirror motifs.

From the Object Relations psychoanalytical point of view, a mother works as the first mirror to the children, for they do not distinguish themselves from their mother. Many mother-child texts of O'Connor deal with mirror images that disturb the boundary between the two. Likewise, variations of father-child texts such as *The Violent Bear It Away*, "A View of the Woods," and "The Artificial Nigger," in which father-figures engage in mothering, also deal with mirror images. Taking the exam-

ple of "A View of the Woods," this essay examines how O'Connor describes the Child as Mother, and verse versa, which problematizes their identities and the patriarchal family structure.

The relationship between 79-year-old Mark Fortune and his favorite granddaughter, 9-year-old Mary Fortune Pitts, can be read as a variation of the Mother-Child relationship: finding his own image in his granddaughter, Mark Fortune named her "Mary Fortune" after his beloved mother, who died at the moment of his birth; the old man tries to possess his mother-like grandchild, from whom he does not completely distinguish himself. He plans to transfer his real estate not to Pitts, but to Mary Fortune, who is abused by her father, Pitts. He also tries to sell his pasture where Pitts grazes calves in order to show his power over Pitts, without thinking how much the pasture means to Mary Fortune, who can not directly love her own father.

Being "mothered" by her grandfather since she was born, Mary Fortune has an attachment to and reliance on her grandfather that is strong enough to resist him when necessary. However, she cannot resist her father, regardless of her stubbornness, because of the deprivation of her father's love: being abused by her father and isolated in her family, all she can do is to obey her father, repressing her own anger, hoping for her father's love.

This essay examines how Mary Fortune's subjugation to Pitts intertwines not only with the patriarchal family structure but also with her love and murderous anger toward her violent father and the old man, which eventually leads Mary Fortune/Mark Fortune into the destructive violence of their mirror-like existence.